Puzzzle文集　9

目次

彼女の小指 1
家に喰われる 1
母は少年のように爺さんと遊ぶ 2
ハリファックス・ベッド 8
白い有給休暇 9
変身 9
明晰夢の中へ 11
神が辞める 16
キャッチャー・イン・ザ・ライン 18
底無しの川 19
奴がいる 20
優美な女性、精神の美 21
巨大な箱で覆う 23
おたふく三八 - 一日目 24
おたふく三八 - 二日目 25
おたふく三八 - 三日目 26
おたふく三八 - 四日目 27
おたふく三八 - 五日目 28
おたふく三八 - 六日目 29
おたふく三八 - 七日目 30

奥付
奥付 34

彼女の小指

　俺はスティックを裁きながら彼女の指に見とれている。はじめから楽器をやるならリズム隊と決めていた。音楽は耳で聞く前に腹で感じるものだろう。本当はベース弾きになりたかったんだ。でも、どうしたってあの太い弦を小指で押さえることができなかった。だから羨むように彼女の指を見つめる。二本の指が歩くように弦を弾き、四本の指が小さな動物のようにフレットを跨いでネックを這い回る。そして、彼女の小指が四弦に伸びると、俺は強くバスドラムを踏んだ。
　スタジオを出たら大抵飲み屋へ向かう。酔った勢いで彼女の小指を強く握ったら平手打ちが飛んできた。
「何してんのよ。痛いじゃない。指ぬき取る気？」
もう少し強く引っ張ったら本当に抜き取れてしまいそうな、細く冷たい指だった。
「なんだよ、惚れてんのか？」
　メンバーの奴らが一斉に俺をカモにしはじめる。たぶん違う。彼女とつきあった奴らからあまりいい話を聴いたことはない。
　酩酊しながら帰る途中、深夜のスーパーでキノコを買う。アパートには既に使用済みのシイタケがいくつも転がっていた。食うのが目的ではない。俺は家まで待ちきれずにパックを開ける。そして、彼女の小指を思いながらその柄を引きちぎった。

　三題噺「キノコ」「楽器」「指ぬき」

家に喰われる

「おまえ、いくつになった？」
「四〇だけど」
「いい加減に家族でも持ったらどうだ？」

俺はおまえの一室に横たわり、そのお節介に顔を顰めた。
おまえは、俺がかつて住んでいた賃貸住宅から駅へ向かう途中に建っていた。ネクタイを締めて仕事へ向かう途中、いつしかおまえは愛想のいい顔で俺に挨拶をするようになった。敷居を跨げば、どこで顧客が見ているか分からない。俺も作り笑顔でそれに応じた。
おまえが分譲住宅だってことには薄々感づいていた。次第におまえは挨拶をするだけでなく、その日の陽気の話などにあわせて、俺の仕事、年齢、家族構成なんかを尋ねるようになった。守るべき家族はいないから隠さなければならないこともない。俺は少しずつ個人情報を洩らしていた。
ある日の帰り道、街灯に照らされたおまえは小声で俺に尋ねた。
「おまえ、いくつになった？」
「三五だけど」
「そろそろだよな。今週末にでもどうだ？」
俺は誘われるままおまえを内見し、確かに死ぬ直前まで働いて借家の賃料を払い続けることなんてできないと、おまえの話に納得させられた。
そして、手順に従って住宅ローン審査を受ける。何も考えずに同じ仕事を続けて来たことが功を奏したのだろう。審査は見事に一発通過。久しぶりに世間に認められた喜びに任せて住宅ローンを組み、団体信用生命保険に加入した。
早いもので、あれから五年だ。俺はおまえの一室で寝返りをうち、家族でももうけて親を安心させたいもんだと思いはじめる。
「三五年ローンを普通に払い続けたら七〇歳だ。払えなくなったら死んじまえばいいだろうが、せっかくの団信がもったいないよなぁ」
俺は笑顔で妻子に看取られる自分を思い浮かべ、おまえのお節介に顔を顰めた。

課題「家の怪談」

母は少年のように爺さんと遊ぶ

「次私、また私、はい私、ＵＮＯっ！」
リビングルームに顔を出せば、母は必死の形相。何が楽しいのか爺さんと一対一のカードゲーム。スキップ、リバース、スキップで、ワイルドドロー４。
「リバースはまた私なのか？」俺は母に問う。
「じゃないと役札の意味ないじゃない」

「ママは強いなぁ」
　爺さんは柔和な笑みで呟く。そして、億劫そうに腕を伸ばし、震える指先で山札から四枚のカードを引いた。
「親父ぃ、私、あんたのママになった覚えはないよ」
　何度聞いても母の「親父ぃ」には違和感がある。
　母は少年のように爺さんと遊ぶ。きっかけはある著名人らの言葉だった。それは本に書かれていたものであるとか、テレビやラジオで聞いたとものであるとかではない。たまたまＳＮＳのタイムラインに流れてきた呟きであった。

知っている人が亡くなると、せめてハグだけでもしておくんだったと後悔するが、生きている人にはなかなか言い出せない。
@yoshimuramanman
2016 年 03 月 14 日 19:37

「私はやるよ」
　母はスマートフォンを投げ捨てて立ち上がった。そして、布団にくるまっていた爺さんを無理矢理抱え起こし、その骨と皮ばかりの頬に肉厚な頬を寄せた。続いて、痩せ細った老体に豊満な胸を押し付けて両腕を巻きつける。爺さんは驚いて「ホイ」だの「ヤイ」だの声をあげる。あらん限りの力で母を振り解こうと試みるが、爺さんは直ぐにあきらめ脱力した。
「まだまだ死にゃしないから」
　母はようやく落ち着きを取り戻し、腕を解いた。北風と太陽の話を思う。ちょっと違うか。

美味しそうな手作りシフォンケーキにおしっこする夢で目が覚めた。
@makotoaida
2016 年 03 月 15 日 05:20

「本当は馬鹿な息子が欲しかったんでしょう」
　母は爺さんを問い詰める。爺さんは布団にくるまったまま、じっくりと言葉を選んだ。

「そんなことはない。確かに、おまえの次は男の子がいいかなとも思ったよ。でも、こればっかりは授かりもんだからな」
「やっぱり、そうなんじゃん」
「娘と息子、両方の親をしてみたいと思っただけのことよ」
　母の息子化が進んだのはそれからだ。俺がまだ幼かった頃のことを思い返し、それを再現する。
「遊ぼうよ」
　そして、布団をバンバン叩く。爺さんは眉を顰めて半身を起こした。
「何がしたい？」

遊びたい一心で声を出してみても、幼い餓鬼は何をしたいのか分からない。家の中で親父と遊ぶ手段といえば、相撲に、チャンバラ、トランプ／ＵＮＯに、双六に。
「相撲するよ」母は無茶を言う。
爺さんはため息をついた。それでもこの国の畳に布団の文化は素晴らしいと思うよ。親子で相撲をとるためになくてはならない。ベッド文化であったなら親子相撲は成り立たない。慎み深いこの国の親子はスキンシップする術を無くしてしまう。
「よし、やろう」
思いがけずやる気を示した爺さんは、拳を突き出し、親指を立てた。
「指相撲？」
母は眉を顰めつつもその手を掴み、同じように親指を立てた。俺は杓文字を掲げて行司になりすます。
「はっけよい」
組まれた拳に力を込められる。
「のこったぁ」
途端に拳が暴れだした。
「一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇っ」
爺さんは唇を突き出して一気にテンカウント。まさかの勝利。
母は呆気にとられたような顔から、不意に涙を浮かべて目尻を垂らした。
「私は親孝行でしたか？ 子供を一人しか産まない女なんて、少子化のこの世界じゃなんの足しにもならないなんて言うのもいるけど、私はあんたにとって自慢の娘ですか？」

「俺だっておまえしか授からなかった」
母は首を傾げる。
「で、自慢の娘なのかよ？」
「そりゃ、もちろん」
「私、息子を産んだよ」
「そうだな。嬉しかったよ」
「じゃあ、もっとこいつと遊べよ」母は俺を指差す。
「もう身体が言うことをきかん」
爺さんは再び布団に潜り込む。
「私たちは二世代で二人しか子供ができなかったんだね」
爺さんからの応答はない。ただ母を憐れむかのよう天井に向かって目を細めた。ひょっとしたら眠いだけなのかも知れない。年寄りはあまり眠らないものと聞いていたが、爺さんはよく眠る。俺はその都度、寝顔を見下ろしながら爺さんの見る夢を想像した。

僕は才能のある人しか好きじゃない。それが例えダメ人間という才能だったとしても。才能は自覚して活用して初めて才能になる。
@ishikawakoji
2016 年 03 月 16 日 11:43

「親父ぃ、あんたの取り柄ってなによ？」
　時折、思うことがある。母は爺さんに問いかけるフリをして、実は俺に問いかけているのではないだろうか。
「指相撲、か？」
　俺は渇いた笑いを漏らす。
「一度勝っただけだろう。なんか、これがあるから俺です。これだけは譲れません。なんてものは無いわけ？」
　爺さんが口を開きそうになると、母は先回りする。
「私たちだとか、つまらないこと言わないで頂戴よ」
　爺さんは眉を垂らして視線をこちらに向ける。そこで俺は助船を出航させた。
「爺さんは俺の想像力を掻き立てる」
　母は眉を持ち上げる。
「あんた、たまには面白いこと言うじゃない」
　その満足げな表現に母の面影を見る。母が爺さんの息子になんかなれるわけがない。

「そのシミだらけでブツブツだらけの顔がいい。薄い毛が静電気で立ち上がっているところもいい。今となっては骨と皮ばかりなのに、人殺しが賞賛される戦争事態を体験しているところが凄い」
　そんなこと口にしていいのか。自問する前に発声を試みた。
「人殺しなんて威張れるもんじゃない」爺さんは言う。
「偉そうに言うな」俺は言う。
「偉そうか？」
「年寄りってのは、それだけで何を言っても偉そうなんだよ。気をつけな」
　母は、俺と爺さんのやり取りを好ましく眺めた。
「若いってのは大した取り柄だ」
　爺さんの言葉はやはり偉そうだ。そして、俺は問う。
「爺さんが今もし若かったら、何がしたい？」
「やりたいことは沢山あるさ」
「例えば？」
「そうだな。まず焼いた貝が食いたい」
「貝？」
「蛤、蚫、栄螺。焼いてチョロッと醤油を垂らしたものだったら浅蜊でもいい」爺さんはゴクリと唾を呑み込む。「嗚呼、歯の無い骨皮筋太郎でも食い意地が張れるもんだ」
「爺さん、貝が好きだったのか？」
「いや、最近テレビで見たせいだろう。栄螺だったよ。網焼きにした巻貝に醤油をチョロッと垂らしてさ、グツグツいい出したら、串で刺してクルクルと緑色した内臓の先まで巻き取るのよ」
　俺はグロテスクなそれを思い浮かべる。貝の内臓など好まない。しかし、その硬い身をしゃぶりながら日本酒を舐めるのは悪くない。
「しかし、爺さん、あんたは酒を呑まないだろう」

「炊き立ての白米が欲しいね」
「貝はおかずになるのか？」
「ならないか？」
「ならないな。牡蛎フライだつて、俺には豚カツの添え物にしかならん」
　俺は新宿さぼてん『カキフライと健美豚ロースかつ定食』を思う。
「若いってのは大した取り柄だな」

先ほど、古館さんのニュース・ステーションで、ドイツのワイマール憲法の教訓「緊急事態条項」の危うさ。たいへん興味深く見ました。「ドイツのワイマール憲法がいつの間にかナチの憲法に変わっていた。あの教訓に学んだらどうかね」という麻生発言が、鮮明によみがえりました。((((;゜Д゜)))
@sasakikensho
2016 年 03 月 18 日 22:56

「今夜の古舘伊知郎は攻めてたね」
　母はうっとりする。お陰でこっちはすっかり目が冴えてしまった。緊急事態条項の危うさ、古舘伊知郎の気迫も然ることながら、ブーヘンヴァルト強制収容所で山積みされた死骸やら、餓死寸前の人間たちが裸で行進する姿やら、そんなものを二二時の地上波で流されるとは思わなかった。
「ＵＮＯでもするか」と言い出したのは爺さんだった。
　母の息子化に伴って爺さんは日毎活力を取り戻しているように見える。時折、俺は爺さんの死に際を思い、どのように立ち振る舞うべきか思案する。しかし、どうやらそれはまだまだ先のことになりそうだ。
　母はケースからカードを取り出し、慣れた手つきでシャッフルしはじめた。寿司でも握るようにヒンズー・シャッフル。カードを二つに割ってリフル・シャッフル。そして、七枚ずつカードを配り、山札を中央に置くと一番上のカードを引いて表に向けた。赤の６。数字の下には９と見紛わないよう横線が引かれている。
　前回、爺さんに勝ったからであろう、母は誰に断るでもなく一枚目のカードを場に差し出す。
「古舘伊知郎、三月までだっけ？」
　赤の２。
「キレッキレだったな」
　時計回りに俺は赤のリバース。「おうっ」と爺さんは小さく声を漏らす。
「緊急事態条項だっけ？」
　半時計回りになって母は赤のドロー２。「おうっ」と爺さんは再び小さく声を漏らす。

「特定機密保護法を通して、安保法案も通して、万能感で脳味噌沸き立ってるんだろう」

　爺さんは山札から二枚を引いて黄のドロー２。俺は鼻を鳴らす。
「まわりが騒ぐから尚更ムキになってんのかもな」

俺は山札から二枚を引いて黄の８。
「自民党草案の緊急事態ってさ、外部からの武力攻撃とか、大規模な自然災害とかだけじゃなくって、もう一つ内乱ってのも入ってるじゃない。あれ引っかかるよね。オウムみたいなのを想定してるんならいいけど、ＳＥＡＬＤｓみたいな子たちも封じ込めたいってことなんじゃ、な、い、の？ 緑っ」
母はワイルドドロー４を叩きつける。「ひんっ」と爺さんは雌山羊のような声をあげた。
「二〇世紀の民主主義憲法の典型だって言われたワイマール憲法でも、『緊急命令発布権』一つでナチの意のままになっちまったってんだからな」
爺さんは山札から四枚を引いて緑のスキップ。母は緑の５。爺さんは緑のドロー２。俺は二枚を引いて緑の７。しばし無言の勝負。母は青の７。爺さんは赤の７。俺は赤のリバース。話題の多くは古舘伊知郎の受け売りだ。そうそう御託は並ばない。
それでもどうしたって理解ができない。
「あいつらは一体何がしたいんだ？」
「どんだけ嫌われても、首相やるからには一度くらい独裁してみたいものなのか？」
「嫌われるっつっても内閣支持率って四割くらいあるわけじゃない。国会議員の選挙投票率が五割くらいだとしてよ、内閣支持してますって言い切るくらいの奴らはやっぱり投票に行くんでしょう。大した数だよね」
「ＵＮＯっ！」
爺さんが声を裏返した。俺と母は肩を揺らす。いつの間にやら爺さんの手には最後の一枚。俺は恐る恐る黄の３。母は赤の３で色の変更を試みる。すると、爺さんは顔をクシャクシャにして最後の札を場に捨てた。それはワイルドカード。
「ええっ、それってありか？」
俺が声をあげれば爺さんは首を傾げる。
「ワイルドカードで上がっちゃいけないんじゃなかった？」
「駄目なの？」母も首を傾げる。
「だって核爆弾みてぇなもんだろ。否応なしにハイ終わりっ」
「日本国憲法も核兵器を禁止してるわけじゃないらしいよ」
母は不敵な笑みを浮かべる。不敵というより不適。すると、『核兵器』という単語に爺さんの反射中枢が応答する。
「核武装して地球をぶっ壊すくらいの覚悟があるなら、逆に自衛官全員で丸腰になって腹踊りでもしてみせろってんだってんだっ」
俺と母は肩を揺らす。そして、荒ぶる爺さんへ恐る恐る視線を運んだ。
「爺さん、あんた総理大臣やんなよ」
「親父ぃ、あんただったら緊急事態条項もありかと思うよ」
爺さんは、そのシミだらけでブツブツだらけの顔を、今まで無いほどしわくしゃにして頬を赤らめた。薄い毛はますます立ち上がる。
あれ？
俺は目を疑う。逆立つ薄毛は静電気のせいではなかったのか？ たまに耳とか鼻の穴とか自在に動かせる奴いるじゃない。俺は爺さんの頭皮に目を凝らした。

母は手元に残った札を広げて溜息一つ。
「もう一度聞くけど、親父には、これがあるから俺です。これだけは譲れません。なんてものは無いわけ？」
爺さんが口を開きそうになると、やはり、母は先回りする。
「私たちだとか、そんな悲しいこと言わないでくれよ。絶対」
俺は想像の中で網焼きにした栄螺に醤油をチョロッと垂らす。
「大丈夫。爺さんはいつだって俺の想像力を超える」
そして、グツグツいい出したら、串で刺してクルクルと緑色した内臓の先まで巻き取る。硬い身は俺のもの。柔らかでグロテスクな内臓は爺さんのもの。そして、その両端から恋人さながらに齧りついた。

ハリファックス・ベッド

ようやく勤め先をみつけて正社員になれたというのに、試用期間に三度も寝坊する体たらく。「次はもう無いぞ」と先輩社員に脅され、「死ぬ気で頑張ります」と俺。意を決して、英国ヨークシャー州ハリファックスから特性ベッドを取り寄せた。羊毛と毛織物の街は、何よりあの処刑道具で有名だろう。縄を離せば大きな刃が降りてくるハリファックス断頭台。
そのベッドは大男二人に抱えられ、アパートの錆び付いた一三階段から二階の一室へと押し込まれた。
「さてと」
俺は揉み手をしてから段ボールを無造作に破る。中には各国の言語によるインストラクションが同梱されていた。久し振りにプラモデルでも組み立てるような気分に胸踊る。

床板に四つ脚を取り付けて、ベッドのポジションを決める。荘厳なベッドは寝室の中央に鎮座させたいところだが、六畳一間ではそうもいかない。横になってテレビが見られるようヘッドボードの向きを決め、部屋の隅に設置した。
続いて、断頭部の組み立てに取り掛かる。重厚なギロチンブレードを垂直レールに挟んで、縄を滑車に掛ける。そして、そいつを枕の手前に立ち上げた。二本のレールが垂直になっているかどうかが重要で、下手に傾いていればサクッとは逝けないようだ。縄を引いてギロチンブレードを持ち上げる。そして、手を離せばストンと落ちた。
「次はもう無いぞ」
俺はあの先輩社員の言葉を口にし、ヒトを小馬鹿にした面を思い返していた。次に遅

刻したら情状酌量の余地無しということか。
　疲れた身体をベッドに横たえ、目覚ましをセットすればギロチンブレードが引き上げられる。続いて、クビを差し入れ、刃を見上げた。確かに次は無い。もうあの嫌な顔を拝むこともない。起きるか死ぬか。答えがはっきりすると、途端にすっきりとした心持ちになる。そして、じわり眠気が襲いかかってきた。

　課題「怖い話」

白い有給休暇

　海に面した公園の柵に凭れ、水平線に目を凝らす。せっかくの有給休暇は生憎の天気で、空と海の境界が分からないほどに靄がかっている。カモメでも飛んでいれば多少リゾート気分を味わえたかもしれないが、頭上にはハトが横切り、驚いて頭を下げれば眼下にはクラゲと死んだ魚が一匹ずつ揺れていた。
　本当はカモメが飛んでいるのかもしれない。こんなにも白い有給休暇だから空に紛れてしまっているのだ。いや、この白さの原因こそがカモメだったりして。やがて目の前も真っ白になって。白濁したクラゲも、白い腹を見せる魚も、何もかもが見えなくなって。
　昔、阿蘇の山道をドライブした時にもひどい霧がかかっていた。ヘッドライトに照らされたセンターラインだけを頼りに、まさに手に汗を握りながらハンドルを切った。
　そんなことを思い返しながら、ところで靄と霧の違いは何かしら。程度問題？ 霧ｔｈａｎ靄？ 響き的には靄ぁｔｈａｎ霧のほうがしっくりくるけれど。馬鹿なことを考えているうちに無数のカモメが世界を覆って、気が付けば足下も見えないほどに白。

　課題「怖い話」

変身

あの夏、あいつは両腕で大きく 2 と描けば、馬鹿みたいに強大な力を手にいれた。そして、シュプレヒコールに沸き立つ群衆を掻き分けて、一人、有らん限りの暴力を行使した。勉強はできる方だったが逆上がりもできなかったコデブ。まさかあんな姿を見ることになるとは思いも寄らなかった。

そんなあいつから電話がかかってきたのはあれから五年が経とうという頃、年々小さくなるがまたあの話題があがるようになる蒸し暑い季節だった。

「よお、元気か？ 俺だよ」

「どなたでしょう？」

その名前を聞いた時、はじめは誰かの悪戯としか思えなかった。お互い勉強はできる方だったからクラスで点数を競っていた記憶はあるが、仲がよかったわけではない。それでも、俺があいつにした些細ないたずらの話題を持ち出されれば、信じざるを得なかった。そして、あいつは悩みを打ち明けた。

「俺さ、あれから元の姿に戻れないんだよ」

あの夏のあいつを思い出す。三分の二以上の議席を獲得した国防軍は憲法に緊急事態条項を盛り込み、好き放題に法律を組み換えていった。そんな最中、酷く醜い姿に変身したあいつは硫酸を吐きながら本会議場へ踏み込み、議会を滅茶苦茶にしたのだ。その惨劇は全国に中継され、今でも全身ケロイド状態の代議士らが悲痛の声をあげる動画がネット上に転がっている。

五年も経てば記憶は薄れる。そして、あの夏を境に交替した政権与党は、再び緊急事態を宣言しようとしていた。

「俺は力を持て余している」

「何が言いたい？」

「緊急事態の宣言が発せられたときは、法律の定めるところにより、内閣は法律と同一の効力を有する政令を制定することができるほか、内閣総理大臣は財政上必要な支出その他の処分を行い、地方自治体の長に対して必要な指示をすることができる（憲法改正草案第 99 条「緊急事態の宣言の効果」より引用）」

「よく知っているな」

「今の何処が緊急事態なんだ？」

「何が言いたいんだ？」

「あの夏、おまえだって議事堂前にいたよな」

俺は舌を打つ。五年前、確かに俺はあいつと目を合わせた気がしていた。

「やっぱり、あれば使ってみたくなるものか？」

俺は議員バッジを握りながら慎重に言葉を探す。

「今でも硫酸が吐けるんだが、何なら気持ちよく宣言させてやってもいいんだぜ」

音を立てて唾を飲む。そして、あいつの提案を断る理由を探していた。

課題「怖い話」

明晰夢の中へ

決して安い買い物ではなかった。それでも会社勤めを続けて十五年が経とうという自分へのご褒美には丁度いいだろう。どんなものでも日時指定で注文すれば、俺の都合に合わせてドアベルが鳴る。訪問販売が時代にそぐわない昨今、我が家のベルが鳴るなんて宅配以外には考えられない。そして、その乾いた音を久しぶりに耳にした週末、俺は思わず頬を弛める。

「はぁい」

声を上げてから口を窄めて頬筋を引き締めると、三文判を片手にいそいそと玄関へ足を運んだ。ドアを押し開け、宅配にやって来た男を迎え入れる。

「宅配便です」

思いの外小さな段ボール箱を抱えたその男は、俺と同年代と思われた。手渡された箱には、予想だにせず大きく「ＶＯＳＳ」と書かれており、少々気まずい思いをした。言うなれば、出張先のビジネスホテルで、エレベーター脇に設置された自動券売機からＶＯＤカードを購入したところ、まさにそのタイミングでエレベーターからヒトが下りてきた。そんな感覚に近いか。そこに疾しい気持ちが無い分けではないのだ。俺は伝票に三文判を押すと、早々に男を追い出し、ドアロックを掛けた。

ところで、「ＶＯＳＳ」とは、とある学者の名前に由来する。

ヒトは、一晩の間に浅い眠りと深い眠りを交互に繰り返す。急速眼球運動 (Rapid Eye Movement) を伴う浅い眠りはレム睡眠と呼ばれ、ヒトはこの時間帯に夢を見るという。レム睡眠時は扁桃体のはたらきによって、昼間に経験したことや学習した内容が脳で整理される。この扁桃体はもう一方で不安や恐怖を感じたときに活動する部位でもあるため、どうしても不安や恐怖を感じる夢を見てしまう確率が高くなる。また、睡眠中は理論性を司る前頭前野が停止しているため、理論的におかしな内容であっても、おかしいとは思わず、それが夢だとはなかなか気づけないのだそうだ。

それでも、自分が置かれている状況が夢の中だと気付くことがある。これは明晰夢と呼ばれるもので、ヒトが夢を見ているレム睡眠と目を覚まそうとする覚醒の狭間で起こるそうだ。ヒトは目を覚まそうとすると、生命現象を司っている脳幹網様体から前頭前野へと神経シグナルが伝達される。睡眠と覚醒の狭間で、未だ夢の中にいながら前頭前野が活動はじめる時、ヒトは夢に気づき、それをコントロールすることができるというのだ。しかし、多くの場合、何かしでかしてやろうというタイミングで覚醒してしまう。

二〇一四年五月、ドイツのヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルトのウルズラ・ボス氏率いる研究チームは、一本の興味深い論文を発表した（Nature Neuroscience

17, 810–812 (2014))。ボス氏らの研究チームは、経頭蓋交流電気刺激（transcranial alternating current stimulation：tACS）と呼ばれる技術を用いて、脳全体に微弱な低周波電気信号を送る箱型の装置を作成した。そして、この装置を用いて、睡眠中の被験者に対し、二ヘルツ、六ヘルツ、一二ヘルツ、二五ヘルツ、六〇ヘルツ、一〇〇ヘルツと周波数を変えて交流電流を送り、覚醒後にいくつかのアンケートを実施した。すると、二五ヘルツと四〇ヘルツの交流電流において、夢の筋書きをコントロールする部分の採点が高くなったという。

ボス氏は、論文の考察として、心的外傷後ストレス障害（PTSD）患者が夢の筋書きを自在にコントロールできるようになることで、頻発する悪夢を克服する助けになる日が来るかもしれないと記した。その一方、睡眠時に誰でも明晰夢を見られるようにする同様の装置が、一般消費者向けに考案される日が来ることは避けられないだろうと述べた。

そして、俺はまさにその一般消費者向けに考案された「ＶＯＳＳ」を手に入れた。そして、取り扱い説明書に従い、スマホのアプリストアを検索している。最近の機械ものは、どれもスマホで操作することが定番のようだ。初任給で買い揃えた家電をいつまでも使い続けている俺にとって、それは物珍しく、アプリのダウンロードにしたって久しぶりの作業だった。幾つかのお決まりパスワードを試し、三度目にしてようやくストアにログインした。かつて社会現象とも言われた何モンＧＯにだって、結局、手を付けることはなかった。だってさ、ゲームってのはさ、通勤途中の電車の中とかさ、就寝前の布団の中とかさ、そんなところでさ、現実世界に舌打ちしながらさ、仮想空間を闊歩するためのものではないのかい。未曾有の猛暑に観測史上最大の豪雨、そんな異常な世の中で、四～五インチの画面に首を垂らしながら、歩き回る気にはなれないだろう。

そして、どうにか「ＶＯＳＳ」アプリをダウンロードすることができた。

「続いて、なんだって？」

取り扱い説明書を捲り、必要なものが揃ったことを確認すると、本体のコンセントをつないで電源をオンにした。箱型の装置から伸びる配線にはヘッドギアがつながれている。どことなくカルト集団の洗脳装置を彷彿させるが、ここから明晰夢へと誘う微弱な低周波電気信号が送られるのだろう。ヘッドギアを装着する前に、スマホと本体の間で無線ペアリングを行う。本体のペアボタンを押すとブルーのＬＥＤが点滅しはじめる。続いて、スマホから通信可能な周辺機器を探索すれば、すぐに「ＶＯＳＳ」と表示された。

「オーケー、オーケー」

苦労すると予想されたステップは難なく通過。俺は機嫌を良くして、ひと思いにヘッドギアを装着した。そして「ＶＯＳＳ」アプリを起動すれば、画面上に波形が伸びはじめる。これが俺の脳波なのだろうか。画面を眺めながら眉間に力を込めてみたが、特に変化はない。続いて、声を裏返して古くさいロックナンバーをシャウトした。

「ボス、ボス、ボースっ」

すると、多少波形が跳ね上がったように見えた。

「ねぇボス、少しだけでもアップね、僕の給料～♪」

波形パターンからレム睡眠を認識して、俺の脳に二五ヘルツや四〇ヘルツの交流電流

を送るのだろう。
「しけてるぜ、ボス」
　俺は舌を打つ。楽しい睡眠をとるはずだったが、嫌なことを思い出してしまった。夢から覚ませば、またドヤ顔の年下上司に「あの案件はどうなった？」、「注文書はいつだ？」と尻を叩かれる一週間がはじまるのではないか。
「まったくしけてるぜぇ♪か」
　手始めに明晰夢に出てきた彼奴をぶっ飛ばしてやろうか。
　残り物で夕飯を済ませて、国産の安物ウィスキーをロックで呷る。これからヘッドギアから微電流を送されながら眠ろうというのだ。その上、明晰夢の中で彼奴をぶっ飛ばそうなんてことまで考えはじめると、どうしたって直ぐに寝つける気がしない。明日からまた仕事だというのに、俺はいつもより多めにアルコールを摂取し、スナック菓子やナッツなども余計に摘まむ。最後に腹の肉を摘まんで深いため息をつくと、腑抜けになってベッドへ潜り込んだ。
そして、いつしか夢の中。なるほど、こいつは面白い。俺は確かに夢の中にいる。しかし、ここは何処なのだろうか。彼奴をぶっ飛ばそうにも自分の置かれている場所がよく分からない。夢の途中から認識がはじまるため、全て思い通りの夢が見られるという訳ではないようだ。
　鮮やかな空。夢には色がないなんて言う奴もいるが、俺の夢は何時だって色鮮やかだ。多くのヒトが行き交うビジネス街のようだが、ピンク色したウサギの着ぐるみに包まれた輩までいる。パチンコ屋の看板でも持ってファンシーに手を振っていれば違和感は無いのだが、ウサギは女物のビジネスバッグを肩に掛け、ヒトの流れに沿って進んでいる。そして、俺はこんな街中にパンツ一枚ではないか。前頭前野に神経伝達が行われ、俺は酷く恥じらう。しかし、誰の夢だと思っているのだ。俺はおもむろに通行人の一人に飛びかかり、そいつの服を引っ剥がす。そして、あまりセンスがいいとはいえない三つボタンのジャケットを羽織ってウサギを追いけた。
　この流れに沿っていけば駅に辿り着けるだろうと踏んだのだ。券売機の前で路線図でも眺めれば、自分の居場所が分かるだろう。そして、電車を乗り継いで事務所へ向かう。彼奴を見つけ出して、この貧弱な拳を大いに振り回してやろう。
　ウサギは振り返ることなくどんどん進んだ。辺りにはレゴブロックを積み重ねたようなビルがいくつも連なる。似たような建物ばかりで駅が現れる気配はない。俺は次第に疑問を持ちはじめた。こんなに苦労してまで彼奴をぶっ飛ばす必要があるだろうか。これからいつだって明晰夢を見ることができるのだ。彼奴が夢に出てきた時にぶっ飛ばせばいいだけのことではないか。
　俺は思い直し、小走りになってウサギとの間合いを詰めた。そして、その大きな耳をつかんで着ぐるみの頭部を剥がし取る。中には玉のような汗を無数に浮かべた女。彼女は立ち止まり、驚きと不安の表情を浮かべた。思った通りだ。と言うより、多少は都合よくコントロールすることができるようだ。俺は彼女を知っている。知っていると言っても、毎朝、昼飯用の弁当を買いに立ち寄るコンビニで見かけるだけの間柄。俺は芝居がかった卑劣な笑みを浮かべる。この箱を購入した理由に、疚しい気持ちが無いわけではないのだ。途端、明晰夢は霞みはじめた。

マズい、目が覚める。
ことを急ごうとするほど目が冴えた。そして、俺は覚醒。スマホを手に取れば、まだ五時前だった。起床時刻まで二時間はあるが、再び寝付くことはできなかった。
コップ一杯の牛乳、そして、眠い目を擦って家を出る。駅までの道すがら、ウサギの着ぐるみを着た女はいない。それでもこの先には確かに駅があり、三線乗り継げば、あの忌々しい上司が腕を組む事務所へと辿り着く。彼奴を見つけたらこの貧弱な拳を大いに振り回してやろう。なんて、まさかね。
事務所の最寄り駅で電車を降り、コンビニに立ち寄る。そして、俺は迷わず『たっぷりタルタルソースのチキン南蛮弁当』を手に取り、彼女が待ち構えるレジへ向かった。
「温めますか？」
昼飯に食べる弁当なんだよ。俺は毎度のごとく首を振る。
「結構です」
二、三の高カロリー弁当をローテーションでレジに運んでいるのだ。温める必要がないことくらい気付いているはずだろう。それでも、彼女は客に目も合わせずマニュアル通りに問い掛ける。俺は俯いたまま袋詰めする彼女の額に見入った。
「四九八円です」
こんな仕事ぶりで玉の汗を浮かべるはずもない。俺は財布から五〇三円を取り出す。

「五円のお返しです」
結局、一度も目を合わせることなく、俺は「レシートが不要な場合はこちらへ」と吹き出しの付いた小箱に受け取ったレシートを差し入れ、何だか知れない募金箱に釣り銭を放り込んだ。コンビニを後にしながら少々憤る。ちょっと見栄えがいいからって粋がるなよ。そして、「ＶＯＳＳ」を思い浮かべながら酷く不謹慎な思いを巡らせた。
事務所に着けば、彼奴だって毎度の通りだ。
「あの案件はどうなった？」
「注文書はいつだ？」
こっちだっていつも通りの回答をするまでだ。
「今週面会なんで、状況確認します」
「先方の事務方で、書類が止まっちゃってるみたいですね」
景気を考慮して目標数値を決めろと言いたいところだが、幾らが適当なのか見当も付かない。
「要するに進捗無しね。状況だけはちゃんと把握しておいて」
家に帰れば好き放題に過ごせる明晰夢の世界が待っている。そう思えば、彼奴の嫌みも左から右へ聞き流すことができた。贅沢を望まなくとも生活は苦労の連続だ。これまでの俺だったら、なんの面白味もない日々にチラッと自殺なんて選択肢が過ぎることもあった。しかし、今となっては、三度の飯が食える程度の稼ぎさえ確保できれば、自由で万能な時間を享受することができるのだ。
儚い世の中であれば浮かれて暮らそう。
世の中に対してこんなに肯定的になれたのは餓鬼の頃以来だ。事務所でコンビニ弁当を食ったら、午後は営業車を飛ばして得意先をまわる。あとは早々に仕事を切り上げて

家に帰るとしよう。家に帰ると言うより明晰夢に帰ると言ったほうが適当か。
　かつて何モンＧＯが出始めた頃、引き籠もりがついに外出したなんて美談もあったろう。あいつはその先に一体何を見たのか。後日談を聞いてみたいところだ。なんてことをぼんやり考えながらハンドルを切った。
　帰りがけに安いウィスキーボトルを買い込み、興奮を抑えて睡眠に備える。ヘッドギアを装着した自分を鏡に映してロックグラスを揺らす。
「カンパーイ」
　左右反転した俺が問う。
「今夜は何をする気だ？」
　酒の量は俄然増えたが、元々弱い方ではない。親から受け継いだデヒドロゲナーゼ遺伝子に感謝しよう。そして、アプリを起動させてベッドに倒れ込む。サイドテーブルにもウィスキーボトルが欠かせなくなった。アルコールの海に脳味噌を浮かべてどうにか眠りにつくと、やがてレム睡眠から明晰夢へ。俺はウサギを追い回し、気に入らない奴がいれば徹底的に叩いた。アルコールに酩酊しながら万能感に酔いしれる。しかし、お楽しみは長くは続かない。前頭前野に送り込まれるシグナルが俺を叩き起こした。
「嗚呼、ふああっ」
　溜息に続いて大欠伸。まあ、それでいいのかも知れない。何であれお楽しみは八分目が丁度いいだろう。それでも、睡眠不足は否めない。レム睡眠の度に前頭前野が活性化されては、なかなか十分な睡眠は取れない。たまにはヘッドギアを外すことも必要だろうが、過剰なアルコール摂取の影響か、「ＶＯＳＳ」そのものの弊害か、中毒性があるようにも思う。
「いつでも微笑みを～♪」
　そんな歌があったでしょう。どうせ一度の人生だから、楽しだほうがいいに決まっている。儚い浮き世でハッピーを追及するのだ。
「あらら、また注文書が来てる」
　そして、気付いた頃には業績アップなんておまけも付いてきた。夢の中であれだけ叩いた彼奴が、機嫌のいい顔で俺のデスクにやってくる。
「どうしちゃったんですか。最近、絶好調ですね」
　目上のニンゲンに対する口の効き方がまるでできていなかった若手上司が、俺に対して敬語を使いだす。
「いつも通りやってるだけなんですけどね」
　鼻を鳴らしつつも自然と口元が綻ぶ。確かにこのところ調子がいいのだ。面会最中にも関わらず、ラップトップＰＣを広げてネット注文を流し出す顧客までいるほどだ。今まではそんなこと考えられなかった。笑う角には福来るか。
　それでも、一点気掛かりなことがあった。
　最近の新しい流行なのだろうか。街を歩けばピンクのウサギを見かけない日はないのだ。

神が辞める

　小さな駅前ロータリーを跨いで通りに出れば、直ぐに『中華そば』と書かれた赤提灯を見つけた。簾を割ると自分以外に客はおらず、注文した中華そばはすぐに運ばれてきた。僅かな白髪をのせた店主は、愛想良くラーメン丼を差し出すと、一仕事を終えたという様子でカウンターの椅子に腰掛け煙草を燻らせた。
　中華そばを啜りながら、店主と揃ってテレビ画面を見上げていると、神が生前退位の意向を示したとの報道が流れた。俺は阿呆のように口を半開きにして箸を止めた。
「ありゃ、なんか大変なことになりそうだ」
　店主はテレビに向かったまま大きく紫煙を吐き出した。
　俺は頭の中に渦巻く疑問をうまく口にできずにいる。テレビ画面に映し出されたテロップの字面から生前退位の意味は推し量れた。それしたって、神って誰だよ。
　神と聞いて思い返したのは、最近購入した古本に記された、巨大な漫画家の言葉だった。
「神と云ふのはこの大自然を生んだ力です。」
　実像でも、虚像でも、作り出された偶像でもない。ここに辿り着く過程に生じた様々な力を何かの導きと考えれば、神と片付けられるのかも知れない。
「時を流すし、植物を生長さし、人間を地上に生さしてゐる不思議な力を云ふ。」
　俺は大量に掴んだそばを一気に啜り上げて、そいつを飲み込むと、店主へ問いかけた。

「大変なことが起こるのだろうか？」
「神が神を辞めるってんだろう。そりゃ、大変だ」
　店主はさして大変でもなさそうに鼻から煙を吹き出した。
「あんたは神を信じているのか？」
「信じるも何も辞めるってんだから、いたってことだよな？」
　なるほど。それは一理ある。店主は煙草の先を赤くして、再び大きく煙を吸い込んだ。その姿に多少の疑問はある。なんで客を前にして煙草なんか吸っているのか。それでも、時がとまったような中華料理店ではそれが許されるようにも思える。いずれにしても、余所者の俺には何も口出しはできない。
「あんたは神を信じていないのか？」
　店主は俺に問い返した。俺はすかさず巨大な漫画家の言葉を口にする。
「神と云ふのはこの大自然を生んだ力です」
「なんですか、そりゃ？」店主は眉間をアシンメトリックに歪めた。
「時を流すし、植物を生長さし、人間を地上に生さしてゐる不思議な力を云ふ」

「するってことは、そいつが辞めちまったらどうなるんだい？」
　時は停滞し、植物は枯れ果て、人間は地上で死に絶える。不意にチェルノブイリのレッドフォレストが思い浮かび、俺は声を上げながら残りの中華そばを一気に平らげた。
「あんたにとっちゃ、大変なことのようだな」
　ニュースキャスターが頭を下げて番組の終了を告げると、店主はチャンネルを変えた。華やかなステージでは、まだ若いのに拳を握って喉を震わせる男が笑顔を振りまいた。

「演歌は好かん」
　店主は自宅で寛いでいるかのように、咥え煙草でチャンネルを回しはじめた。
「どれにしようかな」
　そう呟いたきり、ぼんやりとした様子で幾度もチャンネルを回す。一瞬お気に入りの女優が見えもしたが、その手は止まる様子がない。すると、不意にこちらへリモコンを差し出した。
「なんですか？」
「どうでもいいことは、天の神様の言うとおりにしてきたんだ。俺にはもう無理だ。あんたが決めてくれ」
「んじゃ、さっきのドラマで」
　言われてみれば、俺もさっきから決めかねていることがある。替え玉をすべきか否か。

「俺は替え玉したほうがいいだろうか？」
　店主に問いかけてみると、嫌な笑みを貼り付けながら答えた。
「いや、あんたはまだ中華丼が食えるはずだ」
　腹をさすって胃袋と相談すれば、確かにまだ食える気がする。続けて、店主は言った。

「天の神様が何も言ってくれないなら、店のご主人様の言う通りにしてみるんだな」
　二、三頷けば、店主は厨房に声を上げた。
「丼、一丁っ」
　厨房から注文を繰り返す声が響き、店主と同じ笑みを貼り付けた料理人が顔を覗かせた。
　どこかで見覚えのる顔だ。俺は丼の底を蓮華で掬いながら記憶を辿る。すると、神の生前退位を伝えたニュースキャスターと瓜二つであることに気づいた。俺は目を丸めた。店主はテレビに映る女優を眺めながら、いつまでもにやけている。今すぐに注文を取り消したいところだが、厨房ではすでに中華鍋を打つ音が鳴り響いていた。

　課題「神」

キャッチャー・イン・ザ・ライン

俺は真っ赤な丸首シャツに春色のジャケットを羽織って、ようやく住み慣れてきたこの街を闊歩する。ニュータウンと呼ばれる新興住宅街の中央には交通量の多い県道が貫き、革靴を鳴らして歩道を進めば、かつて大きく報道された交通事故現場が現れた。そこには今でも花束が供えられており、俺は小さく手を合わせる。交差点で二台の乗用車が衝突、その弾みで歩道に乗り上げた一台が看護婦三人をはねたのだ。この街の事件が全国ニュースに流れたのは、後にも先にもこの一度だけだろう。もう五年以上も前のことになる。

その三人と面識があった訳ではない。病院で世話になった記憶もない。それでもあの日から俺は毎週末になるとある女を探し求めている。イメージはしっかりとできていた。その日のために、毎朝欠かさずスタートダッシュのトレーニングを重ねてきたのだ。再び暴走する車が人身事故でも起こそうものなら、俺はすかさず駆け寄りダイビング。間一髪で女をキャッチ。そして、暴走自動車は倒れ込む俺たちの脇をすり抜けて、街灯のポールに激突することになるだろう。そこですかさず俺は優しく問いかけるのだ。

「お怪我はないですか？」

日増しにイメージは確固としたものとなり、間一髪の女はワンレン・ボディコン・ハイヒール。時代設定が古いのは、俺の役柄が冴羽　だから仕方ない。

しかし、ニュータウンでそんな時代錯誤の女に巡り会うことは滅多無い。なおかつ暴走する車にひかれそうなるシチュエーションなど、その場に出交す確率は極めて低いだろう。それは図書館で気になるあの娘と同時に同じ青春小説へ手を伸ばしてしまうくらい。はたまたアパートで若奥様が切らした醤油を借りにくるくらい。さらには可愛いあの娘と激突して心と身体が入れ替わってしまうくらい。夢は必ず叶うなんて、そんな甘い夢ではないと気づきはじめている。そして、俺は「ゲッ・ワイ＆タフ」と口ずさんだ。

課題「大人の夢」

底無しの川

　カシャッと音がした。しかし、振り返ってみても、そこには誰もいない。そんなことが繰り返されるようになり、俺は気味が悪くなって会社の同僚に相談を持ちかけてみるが、まるで取り合ってはもらえなかった。
「気のせいじゃないの？」
　鼻を鳴らす彼女の言葉には「自意識過剰なんじゃないの？」というニュアンスが含まれているようで、腹が立つばかりだ。きっと誰かが俺を監視しているのだ。もしかしたら、寝ている間に宇宙人が現れて、脳になにやら埋め込まれたのかもしれない。不安は募り、次第に仕事が手につかなくなりはじめると、俺は初めて脳神経内科などというところへ足を運ぶことにした。
　しかし、症状を告げたところで、医師は腕を組んで「うぅん」と唸るばかり。
「念のため、脳に損傷がないかＭＲＩの検査でもしてみますか？」
　医師はあまり気が進まぬといった様子で脳検査を提案した。俺は頭の中に埋め込まれたカメラチップを思い浮かべて、「是非」と懇願した。しかし、検査は平日にしか受けることができず、早くても二週間先だという。俺は渋々それを承諾し、クリニックを後にした。
　アパートへ戻り、風呂上りに缶ビールのプルタブを鳴らす。検査は随分と先になってしまったが、頼れる相手を手に入れただけで随分不安は和らいだ。その上、平日に休む口実ができたのだ。俺は幾らか気分を良くし、ビールをグラスに注ぎなおしてベランダに出た。高台のアパートは、二階といっても見晴らしがいい。空に星の輝く冷たい夜だ。そこで再びカシャッと音がした。辺りを見渡すが、通りを走る軽トラック以外にヒトの気配はない。続いて、夜空を見上げた。妙に明るい三日月に目を細めて俺は呟く。
「月は俺が『見た』からそこにあるのか？」
　アインシュタインだったか、シューレンガーだったか、観測者がいてこその実在だなんて屁理屈理論を展開した輩がいる。ならば誰しも日常的にカシャッと聞こえているのではないか。何かが誰かを監視している。脳に埋め込まれたデバイスを通じて全てが何かに観測されている。カシャッと音が聞こえるようになったのは、何も最近になってからのことではないのだ。俺は自分が生まれてから最初の記憶を辿る。未だ若い親父と川辺を歩きながら、この川は底無しだから気をつけろと教え込まれた。どこまでも深い川へと沈んでいく自分を思い描きながら口元を歪めていた幼い俺。あの時だってカシャッと音がしていたのだろう。
　医師に相談をしてから一週間ほどが経った。そして、ふと気付く。最近カシャッと聞こえない。僅かな音だから聞き逃すこともあるだろう。それでも、三日も聞こえない日

が続くと、ひどい不安に駆られた。可愛い同僚にもう一度相談を持ちかけたいところだが、なんと言えばいいだろう。最近、君の観測者はカシャッとしてる？ そんな問いかけをしたところで、やはり俺に適度なダメージを与える返答をするだけで、取り合ってはもらえないだろう。

　さらに一週間が過ぎ、ようやく検査の日を迎えた。俺は看護師によって出来の悪い未来のマシンのようなものに押し込まれると、しばらく脳を掻き回すような轟音に包まれた。そして、再び医師と向かい合う。ディスプレイに映し出されたのは初めてご対面する自分の脳断面。そいつを眺めながら、医師は小さく頷いた。

「血栓だとか腫瘍だとか、緊急を要する異常は特に見当たらないですね」

　俺は愕然として、ディスプレイに身を乗り出した。

「本っ当に何も無いんですか？」

「ま、まあ、ＭＲＩにも解像度の限界があるからね。全く何も無いとは言い切れないけれど、それをこれ以上突き詰める意味はあんまり...」

「例えばカメラとかですよ？」

「カメラ？」

　俺は首を傾げる医師に向かって語りはじめる。

「俺を観測するチップがあるはずでしょう？」

実在は、観測者は、宇宙人は。俺は自らの存在を懸命になって医師へ焼き付ける。実在で、観測者で、宇宙人で。俺は次第に語気を荒らげる。実在だ、観測者だ、宇宙人だ。俺は底無し川の記憶まで時間を巻き戻し、延々と三題噺を展開させた。

　課題「カメラ」

奴がいる

　家に帰ると風呂に入っている奴がいる。

「ただいま」

　自宅の戸を引けば、あいつは答える。

「おかえり」

　独居アパートで「ただいま」と口にするのは、寂しさを紛らす昔からの習慣だ。「おかえり」と返すくらいだから俺の帰りに気づいているのだろう。汗水流して稼いだ僅かな給料で家賃を払っているのだ。勝手に風呂を浴びてもらっては納得がいかない。文句の一つも垂れてやろうと、風呂から上がるのを待ち構えて拳を握る。しかし、いつの間に

か気配は消えていた。

　俺の家に帰ってくる奴がいる。
「ただいま」
　だから、俺は仕方なく答える。
「おかえり」
　ガチャリと戸を引いて「ただいま」と言うからには帰ってきたのだろう。汗水流して稼いだ僅かな給料で家賃を払っているのだ。勝手に住み着かれてはどうも納得がいかない。文句の一つでも垂れてやろうと、風呂場からぬうと顔を差し出す。
「そこで何をしてる」
　しかし、ワンルームの居間にヒトの気配はなかった。

　ある日、夕飯を済ませて帰ってきた俺は、思い切ってユニットバスの中へと踏み込んだ。すると、そこには裸のまま便器に頭を突っ込んだ男がいる。
「そこで何をしてる」
　こっちの問いかけと便器に反響する男の声が重なった。そして、咄嗟に便所から突き出た尻を捕まえた。引き出すべきか、押し込むべきか。悩乱しているうちに俺は男と一緒にズルズルと便器の中へ引きずり込まれていく。そして、気づけば見慣れたワンルーム。そこで思わず口をつく。
「ただいま」

　ある日、風呂を済ませた俺は、文句の一つでも垂れてやろうと、風呂場からぬうと顔を差し出す。そして、いつもより大きな声を張り上げた。
「そこで何をしてる」
　こっちの問いかけとともに何処からともなく声がした。続いて、背後から尻を捕まれた俺は、驚いて咄嗟に風呂場を抜け出した。遂に俺たちは対峙する。そして、思わず口をついた。
「おかえり」

　課題「家の怪談」

優美な女性、精神の美

咲良と名付けられた娘がいた。優美な女性になれと願いを込めて。やがて様々なヒトと出会い、色々な言葉を知る。しかし、学校に通うようになっても親の願いが分からない。
「ねぇ、優美って何？」娘は尋ねた。
「上品で、奥ゆかしい美しさを持っている咲良みたいな子だよ」
ママは上品な作り笑顔を浮かべたかと思えば、続く質問に深い溜め息をつく。
「じゃあ、奥ゆかしいって何？」
「辞書でも引いてみなさい」
辞書によれば、言語・動作が洗練されていたり、深い知識・考えが有るように見受けられたり、慎み深かったりして、心が惹かれる感じとのことだ。
続いて、「慎み深い」を調べてみた。自分の置かれた立場や状況をわきまえて、何事につけても言動を控え目にする様子とのことだ。
娘は辞書を引き裂いて家を出た。

その前日、朔良はまた情けない顔をして家に帰ってきた。
「学校で何かあったのか？」
小僧は首を振って自室に閉じこもった。特別に話すことはない。だから、夕食になればいつものように食卓につく。いつもの時間に布団へ入る。目を覚ませば、朝日の差し込む食卓についた。
そして、パパは何度も聞いた話しを、またはじめる。
「アメリカ初代大統領って知ってるか？」
もちろん知っているが、小僧は首を振った。
「ジョージ・ワシントンだ。そのジョージは、子供の頃、お父さんが大切にしていたサクラの木を間違って切ってしまった」
小僧は、ダメ男が盆栽を割ってしまうＴＶアニメを思い返す。
「でも、それを正直に謝ったんだ」
それに続く言葉だって、しっかり刷り込まれている。
「精神の美。その逸話が桜の花言葉の一つになったってわけだ」
だから朔良なんだって。男なのに。四年生に進学した時に決めていた事があった。パパがあと一〇回同じ話をしたら、学校を辞めてやろう。そして、ついにその日がやってきたってわけだ。
マスクをして、いつもの時間に家を出る。ランドセルにはできるだけ沢山の教科書を詰め込んだ。そして、河原にたどり着いたら、中身を全部ぶちまけてやった。
「朔良」
驚いて振り返れば、優美な娘がこちらを見つめていた。
「咲良」
二人は互いのことを知っていた。幼稚園の頃、二人のサクラとして可愛がられていたから。
「やっぱり朔良」
娘の顔が華やいだ。小僧は頬を紅潮させたが、その大部分がマスクに覆われていた。

「久しぶり咲良」
　小僧は、幼稚園の頃、この娘が好きだった。卒園するとそれぞれ違う小学校へ進学した。こんな惨めな姿を見られないで済んだから、結果的にはそれで良かった。
　時折、ママは言った。
「中学校になったら、また咲良ちゃんと一緒だね」
　ちっとも嬉しくはなかった。ママの言葉に乗せられているだけで、実はこの娘のことなんて好きではないのかも知れない。
　それでも娘は可愛い。人形のような不気味さもある。
「なんでマスクなんてしてるの？」
　教科書を川へぶちまけたことより、そんなことが気になるんだな。
「温かいんだよ。鼻息がさ、この中に溜まるだろう」小僧はそう言ってマスクを摘まむ。

「でも、短パンなんだ」
「顔が温かければ、全身温まるんだよ」
「そうなの？」娘は訝しげにマフラーを摘みあげて顔をうずめた。
　学校行かないの？
　聞いてみたいことではあったけれど、お互いに聞かれたら面倒くさいことだった。
　河原には大きな樹が立っていた。桜だ。未だ蕾も芽吹いておらず、黒い枝を無数に伸ばすだけのつまらない樹。娘はそのうちの一本に手を伸ばすと、口を結んで、徐にへし折った。ジョージ・ワシントンのようなそれではなく、強い意志を持った行為だった。
「だって、嫌いでしょう。桜」
「大嫌いだよ。桜」
　小僧は久しぶりにマスクでは隠しきれない程の大きな笑みを浮かべた。

課題「桜」

巨大な箱で覆う

　一九八三年、俺は明るい未来の新たな力として、旧ソビエト連邦のプリピャチ市に産まれた。既に兄弟たちは活躍しており、俺は四号炉と呼ばれた。
　それから三年後のある日、安全意識の低い組織と未熟な運転員によって、俺は暴走を余儀無くされる。回りだした力の連鎖は誰にも止めることができず、俺は二度の爆発を起こし、その後、約一〇日間にわたって放射性物質を放出し続けた。

そして、間もなく力の飛散を妨げるべく石棺に閉じ込められることになる。再生させることはもちろん、廃棄することすらままならなくなったのだ。周辺のニンゲンは消え去り、松林は赤く枯れ果て、レッドフォレストと呼ばれるようになった。

新たな兄弟たちが生まれつつあったが、さすがに計画は頓挫した。それでも二〇〇〇年まで上の三兄弟は働き続けたというのだがら驚かされる。俺は真っ暗な箱の中で廃棄される日を待った。

石棺の耐用年数は三〇年と言われた。永遠のような話だと思われたが、気づけばその日を迎えていた。ニンゲンが進歩すれば、俺はまた箱の外に出られるかも知れない。なんて淡い期待を抱いていたが、とんでもない。

三〇年目という年に再び取り沙汰されるようになると、俺は新たな事実を知ることになる。石棺の外側に新たな箱が被せられるというのだ。

巨大かまぼこのようなシェルターの建設は進み、今年から来年にかけてレールで移動させて石棺ごと覆う計画だ。俺はさらに深い闇の中へ。そして、廃棄は一〇〇年先に見送られる。

課題「記念にもらつた箱」

おたふく三八 - 一日目

ある朝不安な夢からふと覚めてみると、蒲団のなかで自分の姿が一匹のとてつもなく顔のデカいニンゲンに変わってしまっているのに気がついた。

洗面台に立つと、案の定、左の頬が大きく腫れ上がっていた。すぐにこれが「おたふく」であることは分かった。愛息が八月の初めにかかっていたからだ。

そして、まず気になったことといえば、

「大人になってからかかると生殖機能とかやられるんじゃなかったっけ？」

「なんか言った？」台所から妻の声が聞こえる。

「なんでもねぇっす」

今更やられても問題ないかもしれないが、やはり繁殖を命題とする動物として、生命として、根幹をやられるのはちょっと萎える。

ネット検索し、日曜日でも診察が受けられるクリニックが近くにあることを知る。俺は朝食も採らず、開院時間に合わせてクリニックへ向かった。

初診であること、「おたふく」の可能性があることを受付に告げると、診察用紙とマスクを渡され、診察を待つ皆さんが座るソファーとは別の椅子に座るよう促された。用紙

に顔が突然腫れたことと、息子が今月はじめに「おたふく」をやらかしていることを記載する。それ以降は、これといった持病や大きな病の経験もないため、質問を読み流しながら「いいえ」の欄に丸を付けていく。そして、嗜好品の欄でペンが止まった。酒、煙草に加え、意外なものが選択肢にあげられていたのだ。
「グレープフルーツジュース？」思わず呟く。
　疲れた時にはクエン酸がいいと聞いて、時折、飲みはするが、毎日のように飲むわけでもない。しかし、居酒屋に行けば生グレープフルーツサワーを飲むこともある。俺はひとまず酒とグレープフルーツジュースの欄に丸を付けた。
　やがて、ちょっとぶっきらぼうな声で診察室に呼ばれた。日曜日半ドンだからだろうか、ドクターは俺の顔と診察用紙を見るなり結論を急ぐ。
「耳下腺炎とおたふくって区別がつかないんだよね」
　どこかで聞いた話だ。愛息が患った時も同様のことを言われ、五日間の自宅療養を命じられたのだ。
　そして、ドクターは儀式的に胸と背中に聴診器を当て、血圧と脈拍を測り「異常なし」とつぶやきながらパソコン画面にカルテを入力していった。
「痛み止めを一週間分出しておきますから、一週間経っても様子がおかしかったらまた来てください。」
　え、もう終わり？
「あの、仕事は行っていいんですかね？」
「熱が出たら、二、三日は休んだ方がいいでしょうね」そして、ドクターは嫌な笑みを浮かべて言った。「多分、出ますよ」
　その日は、左頬に違和感がある以外、特に症状は見られなかった。午後には愛息と公園の森に入ってカブトムシを捕まえたくらいだ。夜には読みかけの「穴（講談社）」を進める。

おたふく三八 - 二日目

　流石はドクター、見事に熱が出た。早朝に目を覚まし、気怠い身体に体温計をはさめば三九℃を越えている。俺は一週間の仕事の予定を思い返し、少々頭を抱えた。そして、まずはボスとアシスタントに連絡をすべくメールボックスを立ち上げた。「おたふく」のようで、ドクターには熱が出たら二、三日は休むように言われていること。そして、一週間の予定と九時に電話する旨を記載し、メール送信。
　大人の「おたふく」が大変だということは、なんとなく一般的に知れ渡っている。九時

にボスの携帯電話に連絡を入れれば、二、三日と言わず一週間休むよう提案された。顧客訪問の予定には何とか代理を調整してみるとのこと。俺は、今すぐにでも会社に駆けて行ってボスをハグしてチューでもしてやりたい気分だったが、そんな気力は残されていなかった。俺は電話越しに何度も頭を下げて電話を切った。

愛息に続いて愚夫の「おたふく」となれば、妻も慣れたもので、堅いものは食べられないだろうからと、ジュース、プリン、ゼリー、ヨーグルト、アイスクリームといった類のものをごっそりと買い集めてきた。

午前中のうちは熱と耳下腺の痛みにうなされていたが、午後になると熱も三七℃代となりいくらか落ち着いた。体温の低いうちに熱いシャワーを浴びて服を着替える。

夜になればまた熱が上がってきた。夕飯には素麺を試みるが、それですら堅すぎる。ヨーグルトに入っている果実すら噛めないという状況で、耳下腺の痛みに顔を顰めながら、薬を飲んで蒲団に倒れ込んだ。

おたふく三八 - 三日目

右頬も腫れてきた。洗面台に立てば、誰かに似ている。俺はエラの張った会社の同僚の顔を思い浮かべていた。これは心に秘めておこう。午前中はやはり熱が高い。そして、相変わらずゼリーの果実が噛めない。俺は愛息に果実をほじらせ、ゼリー部分だけを飲むようにして腹を満たした。最後にジュースを飲んでみるが、それだけでも、痛みは増すような気がする。不審に思った妻がネットで情報を漁れば、唾液が分泌されると痛みが増すという。酸っぱいものや味の濃いものなどを食す限り、顎を動かさなくても痛みを伴うとのことだ。俺は項垂れ蒲団にもぐった。

午後になり目を覚ますと比較的楽になる。そして、熱はそのまま下がっていくかのように思えた。今朝までは、少し食べては布団に入ることを繰り返していれば、すぐに眠りにつけた。しかし、熱が引いて幾分か身体が軽くなると眠れなくなってくる。俺は「穴」を読み進め、愛息は自分がうつしてしまったことに多少の罪意識があるのか、一匹の犬を折って寄越した。

夜には卵雑炊を食し、痛む耳下腺を抑えながら布団に入った。が、眠れない。夜も更けてくると、また耳下腺だけでなく耳の中まで痛みが襲う。眠れない。俺は夜食後に痛み止めを飲まなかったことを思い出し、いちごミルクでいくらか胃を満たしてから薬を飲んだ。痛みはすぐに引いた。薬ってこんなにすぐに聞くものかと訝りながら蒲団に潜る。が、眠れない。

おたふく三八 - 四日目

眠れない。夜な夜な起き出して、持ち帰っていた会社ＰＣを開き、メールの仕分けなどをはじめた。そして、眠くなるまで闘病記でも書いてみようかとキーを叩きはじめたのであった。眠れないまま、日が昇る。いい加減に蒲団にもぐるか。

どうにか三時間ほど眠ることができた。ある程度すっきりとした気持ちで、体温計を脇に挟めば平熱に戻っていた。顔の違和感を除けば、確かに体は調子がいい。そして、洗面台に立てば、顔面は私上最大のサイズを示している。

ところで耳下腺とはなんなのか。熱が下がると、そんなことに興味を持つ余裕すら湧いてくる。そして、ネットを探る。耳下腺は三大唾液腺（耳下腺・顎下腺・舌下腺）と呼ばれ、まさに唾液を分泌する器官の一つであった。耳下腺からの唾液分泌は副交感神経が働いているときで主にストレスが無い時や食事中に起こるそうだ。仕事に行った方がいいのではないかとふと思う。また、味覚や咀嚼のような外的刺激によっても分泌量が変わるとのことで、やはり、顎を使うという行為も痛みが増すことになるようだ。

（参照:http://www.ninomiya-kyouseishika.or.jp/app/Blogarticleview/index/ArticleId/83）

そして、昨晩の雑炊を啜れば、かつてない痛みに絶句。俺は今まで口にしたもので最も痛みの弱かったものを思い返す。温かい玄米茶と砂糖の入っていないミルクコーヒー。俺は玄米茶で口内を濯いで一息つくと、無糖ミルクコーヒーを喉の奥へと流し込んだ。そう。味覚を刺激してはならない。俺は玄米茶をチェイサーに無糖ミルクコーヒーを流し込んでいった。

調子はどうだ？

会社携帯にボスからのショートメールが入っていた。もう少し病んでいたい気持ちではあったが、俺のために余分な仕事を割り振られた同僚を思うと、そう甘えてもいられまい。

今朝熱は下がったようです。耳下腺は腫れたままでまともに食事ができない状況です。メールは見るようにします。

回復に向かっていることを伝えつつ、まだ病んでいる最中であることをアピールする。

最後の「メールは見るようにします。」は余計であったか。俺は止むを得ず、会社ＰＣを開いて、夜のうちに仕分けしたメールのうち回答しておいた方がよさそうなものから順に返信した。仕事を始めると、交感神経が働くのか、耳下腺からのサラサラ唾液は止まったようで顔が楽になる。なんとも嫌な病だ。

一つ、二つ、メールを送ると、こっちもやっておいた方がいいかな、あっちもやっておいたほうが来週楽かなと、なんだかんだと二時間近くＰＣに向き合っていた。すると不意に寒気が襲う。

「やば」

俺は蒲団に潜り込む。体温計を差し込めば、また三七℃強まで熱が上がっていた。妻は買い物に行くと言い出し、俺は追加の牛乳を要望。「ウィダーインゼリーみたいなのだったら飲めるかな」などと呟いた。

妻が戻ると、一リットルの牛乳とウィダーインゼリーのように吸って飲むタイプのＣ１〇〇〇ビタミンレモンゼリーを取り出した。見るからに酸味が強そうで、案の定、俺はそいつは二口啜って断念した。玄米茶で口内を濯いで一息つくと、無糖ミルクコーヒーを喉の奥へと流し込む。どうやら、「おたふく」中の最高の食事は、玄米茶をチェイサーにした無糖ミルクコーヒーのようだ。

微熱と鈍い痛みにうなされ蒲団にもぐった。三七℃程度の熱は何故か眠れない。痛みに耐えながら以前ブックオフで購入した「ねにもつタイプ（筑摩書房）」を開く。寒気がして布団に潜る。結局眠れず「ねにもつタイプ」を読み耽る。病んでいたいなどと願った腐れ根性への天罰なのだろう。

夜には湯船に浸かってみることにした。三八℃くらいの熱があったが、湯に浸かって身体を温める。風呂上りには冬用の寝巻で身体を包む。身体を温めていると眠気に襲われ、その夜は十分な睡眠がとれた。

おたふく三八 - 五日目

目を覚まし、熱を測れば平熱。両の頬に手を当てれば、お、何だか顔小さくなった気がする。しかし、洗面所に立てば相変わらずのデカい面であった。俺は汗ばんだデカい髭面を水で洗い流し、朝食をとる。卵豆腐を試してみるが、やはり痛みが走る。結局、玄米茶をチェイサーにミルクコーヒーを嗜んだ。ほぼミルクだけでも暮して行けるもんだ。今なら遊牧民になれるかも知れない。俺はデールに身を包んでモンゴルに立つ自分を思い描いていた（ユキヒョウのドキュメンタリーを見たばかりであったせいもあると思う...）。

熱は完全にひいたようだ。日中は一睡もせず、時折、会社ＰＣを開き、「ねにもつタイプ」を開き、ぼんやりと過ごす。熱による気怠さもなければ、何も口にしない限り痛みもない。愛息の夏休みも昨日で終わり、実に穏やかな一日だ。しかし、味覚を刺激するものを口にできないというのは非常に侘しいものだ。普段から自分が如何に無駄喰いをしていたかということが実感できる。少し外に散歩でも出たい気分だが、腫れが引いていない以上、公衆の場へ出向くのも気が引ける。そして、なにより会社を休んで療養中の身であるため、ジッとしていないと心苦しい。

昼食も主にミルクコーヒー。そして、今更になって食後の痛みを抑えるために保冷剤を使うことを学ぶ。患部を冷やすことで、結構、痛みは和らいだ。

夕食のミルクコーヒー後には、なにか嗜好品でも口にしたいなどと欲を出す。回復に向かっている証しだろう。いきなり酒はハードルが高そうで、ひとまず炭酸水を飲むことにする。微かな酸味はあるものの、痛みはほとんどなかった。俺は疼く耳下腺に保冷剤をあてがいながら、終わりゆく夏の夜長にグラスを鳴らした。

おたふく三八 - 六日目

眠れん。ヒトは最小限の活動と摂取で暮らしていると、あまり睡眠が要らないものなのか。俺は夜な夜な起き出し、スマホを弄ったり、文庫本を捲ったり。それでも蒲団に戻ってから四時間程度は眠れたろうか。顔の疼きで目を覚まし、洗面台に立てば、やはりデカい面。髭が伸び続けた以外に特に変化はないように思えた。

朝はミルクコーヒーに加えてミカンゼリーを試みる。果肉を避けて、フルフル部分だけをスプーンで掬っては、飲むように流し込む。三口食べて、あ、いける。そう過信して連続７口にチャレンジしたところで撃沈。保冷剤を片手にうずくまる。

愛息を学校に送り出してから、少し外を歩くことにした。デカい顔をマスクでいくらか隠し、黒のハットでも被れば病人だと怪しまれることはないだろう。そして、図書館にて「穴」を返して、「わたしを離さないで（早川書房）」を借りる。蔦屋にて「ローズ」のサントラを返して、「レッド- 最後の六〇日間そしてあさま山荘へ②（講談社）」を購入。満足して、モスバーガーに辿り着く。そして、鞄からポケットハンカチに収められた保冷剤を取り出し、コーンポタージュとモスシェイクに挑むことにした。

結果的にコーンポタージュはアウト、モスシェイクはセーフだった。しっかりとしたコーンの触感が残されたポタージュスープはとても美味いのだが、今の俺にはまずかった。

かつてマクドナルドでは、お湯に味付けをしたようなコーンスープやココアが売られ

ていた。今の俺にはあれがいいのかも知れない。「世の中に要らないものなど無いんだ」誰かが言っていたことを思い出す。
「モスシェイクの対局にあるのが酸辣湯麺よね」ふいに妻は言った。
　一瞬思考が停止するが、なるほど。確かに、今、俺が喰ったら悶絶すること間違い無しだろう。保冷剤をあてがいながらであれモスシェイクを飲み干せたのは快挙だ。
　しかし、甘いものというのはどうしても食事として心が満たせない。食に欲を出せないなんてニンゲン的な生活とは言えない。俺はマクドナルドに匹敵するほどのコンソメコーンスープを再現すべく、粉末のクノールカップスープ（減塩）を購入し、夜が更けるのを待った。
　適量のお湯でコーンスープを作成し、クルトンを除く。さらにお湯を足すよりは世話になっているミルクを入れるほうがいいだろう。ミルクはいつだって俺の味方だ。熱々は飲みづらいため、冷えたミルクを足しながら、スプーンでかき回していく。
　そして、食卓にコップ一杯の無糖ミルクコーヒー、特性コンソメコーンスープ、そして、豆腐（プレーン）を一丁並べた。無糖ミルクコーヒーはもちろん、特性コンソメコーンスープを完食。そして、豆腐一／四程度をスプーンで削って食うことに成功。久しぶりの満腹感と眠気に襲われ蒲団に入った。

おたふく三八 - 七日目

　よく眠れた。が、洗面所に立てば、まだ顔デカいじゃん（横浜弁）。もう七日目だぞ。実はもともとこんな顔だったのではないかと訝りはじめる。
　朝にはアロエヨーグルトとグラス一杯のフルーツジュース。酸味が強いためか、痛みは出たが完食できた。昼には特性コンソメコーンスープと豆腐を一／四丁。それにバニラアイスを少々。多少の痛みはあったが、確かに回復していることが分かる。
　痛みばかりが長引いたが、特に合併症などが無かったことは不幸中の幸い。真っ先に心配したアレへの影響もなく、回復に向かっている。月曜日の社会復帰に向けてひと踏ん張り。デカい顔もいつか萎むものと信じている。
「治ったら何が食べたい？」妻が聞く。
「そうだな」俺はデカい顔を撫でながら考える。「カレーかな？」
「カレー？」妻は拍子抜けした様子で俺を見る。
「野菜とか肉とかゴロゴロしてるやつね」
　味が濃くて、ベッタベタしたそいつを口いっぱいに含んで、ムシャムシャと噛み砕いてやるのだ。ムシャムシャと。そんな大いなる野望が達成される日も近い。

奥付

奥付

Puzzzle 文集 9

https://puboo.jp/book/109184

著者：puzzzle
著者プロフィール：https://puboo.jp/users/puzzzle/profile

感想はこちらのコメントへ
https://puboo.jp/book/109184

電子書籍プラットフォーム：パブー（https://puboo.jp/）
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

Puzzzle文集9

版番号の予定

{{--
--}}

著　者　　書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社